

資料1 指導過程の工夫

単元名 いれもののおおきさ (1/4時目)

	学習内容・活動	教師の発問
基礎確認	1. 2つの同じ容器に入った水を比べる。 ・多い方……高さが高い	「どちらのカップに水がおおく入っている」
課題をつかむ	2. 2本のピンを見て課題をつかむ。 (1)2本のピンを見て、気がついたことを発表する。 ・とうめいのピン・茶いろのピン ・高い ・とうめいのピン大きい(高いこと) (2)課題をつかむ <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 5px 0;">どちらに、みずがおおく、はいるかな</div>	「2本のピンがあります。気がついたことを何でもいから発表してください」 「どちらに、水がおおくはいるかな」 「今日勉強したことは」
予想をする	3. 予想をする。 (1)各自予想をする。わけも考える (2)予想を発表する ・とうめい……ながい(高い) ・ちやいろ……ふと、大きい?	「どちらに、おおく入るかな予想しよう。わけがわかる人はノートに書いてみよう」
考え、確かめる	4. 調べ方を考えて調べ確認する (1)調べ方を考える ・かた方に水を入れて、他方に水を移しかえる ・同じ入れ物に、いくつぶん入るかを考える ・高さ(高さ)をはかる (2)調べ方を発表する(実際にやる) (3)結果を確認する ・ちやいろのピンの方が、同じ入れものにおおく入った。	「どんなやり方で調べられるか考えよう」 「やり方がわかった人にやってみよう」 「同じ入れものに入れて、いくつぶんあるかかぞえるのだね」
わかる、やってみる	5. 課題と調べた結果から、わかったことをまとめる。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 5px 0;">みずがおおくはいつているか ↓ おなじれものでいくつぶんか、かぞえる。</div>	「どちらにおおく入っていたかな」 「どんなやり方で調べたかまとめよう」
次時の課題をつかむ	6. 次時の学習について話し合いつかむ。 ・同じ入れものを使わないで調べよう。	「同じ入れものを使わないで調べられるかな」

- (3) 発問の工夫
グラフと表。
児童の発表した考えを生かすようにするため、友達の発表について、どの児童も各自の問題として考えやすいように、発問の内容を児童に問いかけるようなものとした。
- (4) 特別教室の活用
指導内容によって、理科室、家庭科室を利用することにより、「先生、今日何やるの」と教師が黙っていても興味を示し、楽しく活動するようになってきた。
- (5) 学級のふん囲気づくり
① 教師の姿勢として、一人一人の児童全員をいつも先生は大切にしていることを生活の中で感じさせたい。
- ② 間違えても、みんなで考える問題の提供者として、決して笑わない指導を徹底させた。
- (三) 基礎的、基本的事項を身につけさせるための評価について
① 形成的評価と補充指導計画
年間の評価計画に基づいて評価を行い、個人差に応じた指導をし、下位目標がその時間に達成されない場合、個別指導をしたり、同じ系統の単元で再び指導を行い総合的評価で確かめるなど、年間をとおして必ず一つ一つの目標を達成させるよう努力した。(資料2)
- ② 情意面の評価
① ノートによる授業の楽しさの

資料2 形成的評価と補充指導計画

単元名 (たし算1)

記号V 5問中4問以上正答(達成) 上位目標下位目標の内容は別紙(省略)

上位目標	(1)	(2)	補充問題	
下位目標	①	②	①	②
評価の方法	小テスト(ノート)P.14	プリント	小テストP.17	小テストP.18 プリント
抽出見	① 36 + 2	② 73 + 5	① 25 + 9	② 9 + 33
	③ 88 + 61	④ 4 + 53	③ 8 + 79	④ 68 + 2
	⑤ 83 + 2	④ 54+32 ⑤ 11+78	⑤ 9 + 41	⑤ 65 + 27
				② 34 + 48
				③ 37 + 35
			④ 22 + 38	
			⑤ 57 + 23	
			① 55 + 37	
			② 44 + 38	
			③ 33 + 27	
			④ 19 + 71	
			⑤ 67 + 13	
T・Z	V	V ④	V	V
Y・R	V	V	V	V
A・H	V ②	V	V	② ④ ⑤
				1)の②で1つ間違いたが、達成している。計算練習
				5月15日(2)の②の下位目標達成

誤答の問題番号

- 六 研究の成果と今後の課題
- (一) 成果
① 児童は、「やる気」を持って課題に取り組み、考えを発表し、友達の発表を聞き、また、考え、大切なことをノートするなど学習の仕方がわかってきた。授業の途中で飽きてしまう児童が少なくなってきた。
② 年間を見通した評価計画の研究により、能力差に応じた評価の仕方がわかってきた。
- (二) 今後の課題
① 自己教育力を育てるための学習指導と評価のあり方はどうすればよいか。
② 意欲的に学習に取り組ませる手だてとして、児童の認識過程を十分に考えた工夫が必要であった。事例提示、発問などで児童全員に意欲的に取り組ませようとしたが、場面理解が難しい児童も多かった。
③ 情意面の評価を試みたが、それを授業の中で、どう生かしていくかが今後の課題である。
- ② 観察による授業に対する関心
③ ペーパーによる総合評価
以上によって評価すると、児童が授業に喜んで参加していたかどうかかわかった。
計算カードにより評価を実施したが、自分の間違いを生かしていく点で効果的であった。